

# 耶馬溪

熊谷九寿

制作年：1970(昭和45)年

サイズ：72.7×100.0cm

材質：油彩、カンヴァス

所蔵：中津市木村記念美術館

1993(平成5)年中津市に寄贈される。



耶馬溪は大分県の山国川沿岸の景勝地で、禅海和尚が通行人の安全のために掘ったトンネル「青の洞門」が有名です。江戸時代の儒者頼山陽も訪れ、その奇岩奇勝を「耶馬溪図巻」にしました。現在にいたるまで様々な文人、画人が題材としてとりあげています。

中学時代の夏休みには耶馬溪に遊んでいたという熊谷も、例にもれずこの地を絵に表しました。耶馬溪のデッサンが残されている事から、実際に赴いた写生を元に制作をしていたと思われます。記念すべき昭和17(1942)年の国画会展初出品にも「耶馬溪」をとりあげていますし、昭和18(1943)年の資生堂画廊の個展の際は、「故里耶馬へ引籠って製作した」と述べる「巖山驟雨」を制作し、500号の大作であったといえます。

また同郷の画家長野静司氏への書簡の中に、次のようなものがあります。「帰東直前 耶馬溪墓参の帰り 車中より見た競秀峰(洞門)が夕日をうけ水に映じことの外美しいのが忘れず 昔のデッサンを探しましたが見つからず それで御迷惑とは思いますが競秀峰(洞門)の対岸から洞門の方を近くにして(洞門は入れても入れなくてもどちらでもよろしい)写真をうつして送っていただけませぬか。欲を云へば貴君のデッサン二三枚(簡単でよろしい)描いて送って下されば幸甚です。」(昭和27(1952)年8月15日日付の長野静司氏宛の書簡より) その場で描く事は出来ずとも、熊谷は写真やデッサンをもとに、自分の受けた美しさへの感動を合わせて絵にしようとしたのでしょう。

中津市所蔵の耶馬溪は、手紙にもある「競秀峰」を描いたものと思われます。美しく紅葉し、山国川の澄んだ水の流れが画面を清々しいものになっています。郷里から遠く離れ住んだ熊谷でしたが、故郷の風景への思い入れの強さが伝わってきます。